

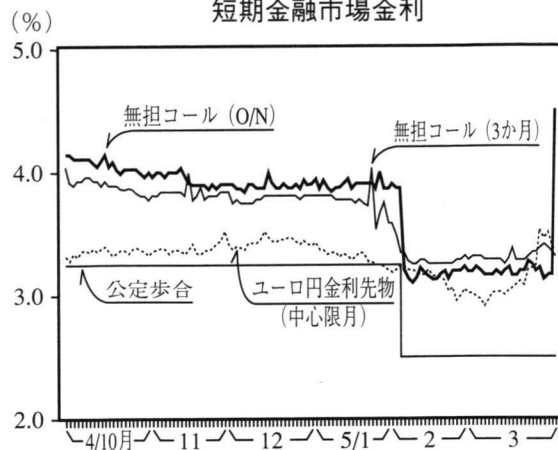
# 金 融 市 場 動 向 (平成5年3月)

## 1. 短期金融市場

3月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は、横ばいで推移した後、月末、期末要因等から大幅な上昇をみた。一方、ターム物レートは、安定的に推移した。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）は、上昇傾向をたどった（なお、19日に限月交替＜中心限月：9月限→12月限＞）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は44兆3,979億円と、ほぼ前月（44兆6,335億円）並みの水準となった。

短期金融市場金利



## 2. 資本市場

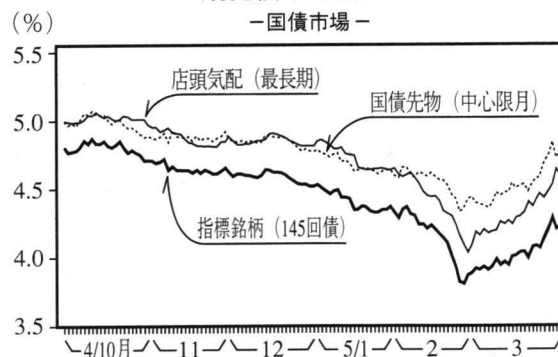
3月の国債利回り（145回債）は、高値警戒感もあって月中を通じて上昇し、4.210%（前月末3.865%）で越月した（国債先物中心限月4.745%＜前月末4.414%＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）、先物ともに前月を上回った。

株式市況（日経平均株価）は、外国人投資家を中心に買い姿勢を強める動きがみられる中、大幅に上昇し、個人投資家の買いもあつ

て結局18,591円（前月末比+1,638円）で越月した。この間、株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）も、4.79億株と前月（2.39億株）を大きく上回り、平成3年9月（4.82億株）以来の水準となった。

既発債市場利回り  
—国債市場—



起債動向をみると、長期国債（4月債、10年＜価格競争入札分＞）は、クーポン・レートが前月債比0.3%引き上げられた（4.2%→4.5%）こと等もあり、総じて順調な入札となった（3月31日入札分：募入平均利回り4.458%、応募倍率4.20倍）。また、短期国債については、軟調な債券市況を受けて、6か月もの、3か月ものとも、総じてやや低調な入札結果となった（3月5日入札分＜6か月もの＞：募入平均利回り2.904%、応募倍率1.88倍、3月17日入札分＜3か月もの＞：募入平均利回り3.036%、応募倍率1.17倍）。

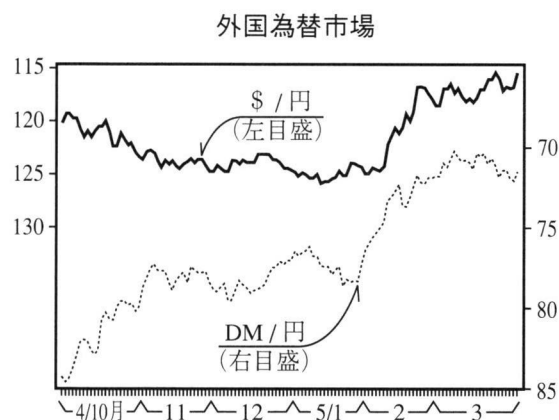
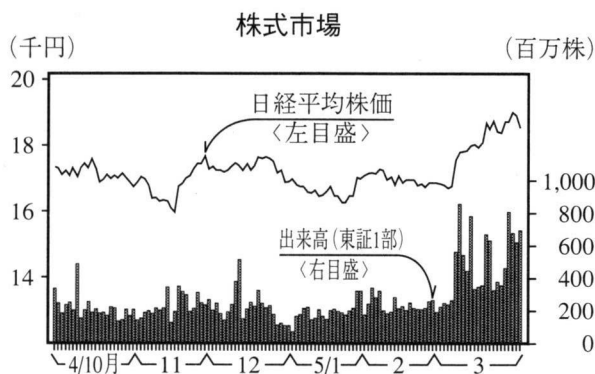
国内公募普通社債の発行は、既往最高の起債となった前月をさらに上回った（2月5,000億円→3月5,760億円）。

国内エクイティ市場での発行（3月払込み分）は、前月を若干下回った（2月1,330億円→3月1,245億円）。

### 3. 外国為替市場

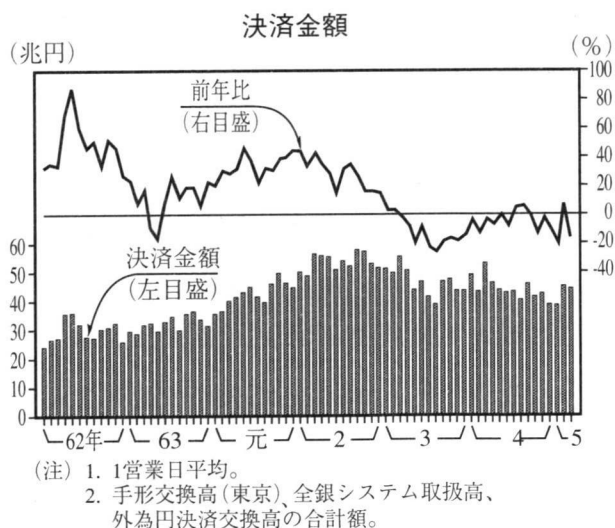
3月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、先月からの円高の地合いを引き継ぐ中、米国景気の回復テンポに対する幾分慎重な見方が広がったこともあり上昇、23日には115.33円と既往最高値を更新して、結局115.35円で越月した（前月末117.85円）。一方、円の対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）は、一進一退で推移、71.44円で越月した（前月末71.85円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は167.4億ドルと、前月（187.8億ドル）を下回った。



#### 4. 決 済

3月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、日本銀行当座預金受払額は前年同月を上回った（日本銀行当座預金受払：前年比+5.8%）が、手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高は、それぞれ前年同月を下回った（手形交換：前年比△13.3%、全銀システム：同△5.6%、外為円決済：同△19.2%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振決口座振替）は、前年同月に比べて、移転登録、振決口座振替ともに増加した（移転登録：前年比+43.7%、振決口座振替：同+31.3%）。



#### 5. 資金需給、金融調節

3月の資金需給をみると、銀行券要因が5,279億円の余剰（前年同月3,274億円の不足）となったのに加え、財政等要因も、交付金や公共事業費等の年度末払いが多額に上ったため、4兆544億円の余剰（前年同月2,425億円の余剰）となり、全体では4兆5,823億円の余剰（前年同月849億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B売却等により資金を吸収した。

4月の資金需給（国債発行織り込み前）をうかがうと、銀行券要因については、5,000億円程度の不足（前年同月4,229億円の不足）となる一方、財政等要因は、地方交付税交付金や公共事業関係費の支払い等を中心に、6兆9,600億円程度の余剰（前年同月6兆4,723億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では6兆4,600億円程度の資金余剰（前年同月6兆494億円の余剰）と予想される。

#### 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

2月のマネーサプライ統計をみると、M<sub>2</sub>+C D平残前年比伸び率は+0.2%と前月比0.5%ポイント上昇した。これは、金融機関保有C Pの伸び率が上昇したことに加え、財政要因（税揚げの減少など）等がマネー押し上げに働いたことによるもので、通貨種類別にみると、預金通貨の伸び率は低下したものの、現金通貨が上昇したほか、準通貨の減少幅が縮小した。また、広義

流動性の平残前年比伸び率は+2.9%と前月比0.3%ポイント上昇した。

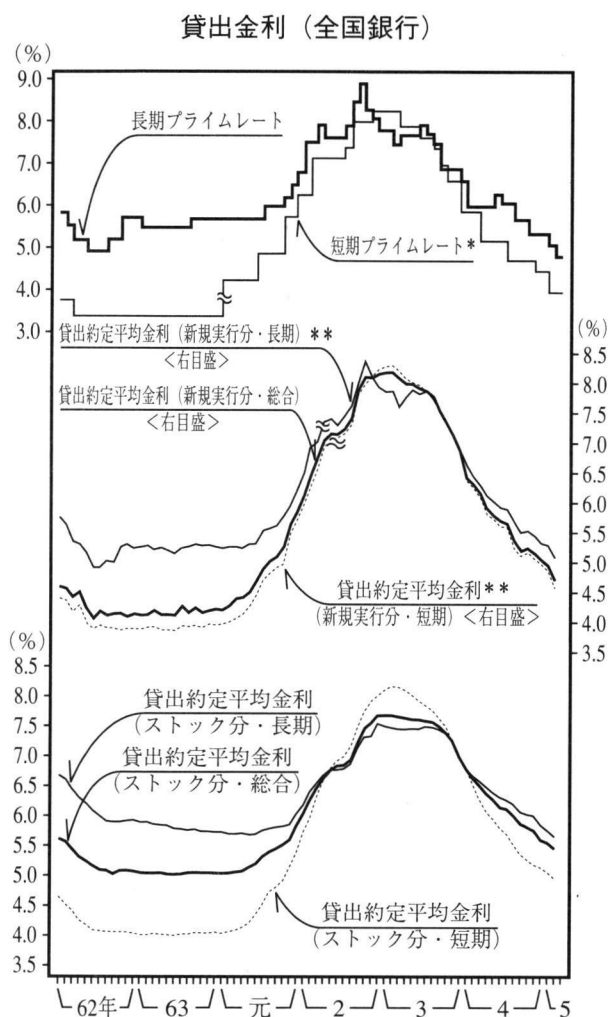
3月の銀行券平残前年比は+2.9%と前月を下回った。

3月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀II）は、前年比△0.7%と9か月連続の前年割れとなった。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀II）は、前年比+1.3%と既往最低の伸び率となった。

## 7. 貸出・預金金利

2月中の新規実行分の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、短期は短期プライムレート（全国銀行）をみると、短期は短期プライムレート引き下げ、長期は長期プライムレート引き下げ等の影響からそれぞれ低下し（短期：前月比△0.222%、長期：同△0.170%）、総合でも前月比低下した（1月4.955%→2月4.746%）。このため、ストック分（全国銀行）でも、短期・長期貸出金利低下を反映して、短期、長期がともに低下し（短期：同△0.135%、長期：同△0.077%）、総合でも3年8月以来19か月連続の低下となった（1月5.556%→2月5.461%）。

この間、2月の自由金利定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比低下した（1月3.346%→2月3.037%）。



(注) \* 元年1月以降は都市銀行の中で最も多くの数の銀行が採用した金利。

\*\* 2年4月以降は地方銀行IIを含む。

(平成5年4月14日、調査統計局)